

祐盛抄について

—— 奥義抄・和歌色葉との関係から ——

浅 田 徹

本稿では祐盛抄という作品をとりあげるが、これは色葉和難集に「祐盛云（祐云）」という形で引用されて断片的にその内容が知られるだけの散佚歌学書である。題名も不明なのであるが、ここでは原田芳起氏の仮に付けられた名称に従う。

祐盛抄についてはまだ研究が進んでおらず、考証すべきことが残されていると考えられる。本稿ではその逸文を一覧し、成立・性格などを論じてみたいと思う。

一、祐盛抄と奥義抄

色葉和難集（以下、和難集と略称）に「祐盛云」「祐云」と記す数多くの引用が存在することはすでに知られている。俊頼息とされる祐盛法師がこれにあたることは間違いないと思われる、もし真作であれば平安末期ないし鎌倉初期の歌学書として注目されるわけである。

祐盛については早く杉崎重遠氏「祐盛法師」（槻の木12—2、昭12・2、『王朝歌人伝の研究』昭61・3に所収）が基礎的な資

料を呈示され、さらに大取一馬氏も「俊恵と祐盛——その歌論と歌と——」（高野山大学論叢13・昭53・2）で同様の作業を試みておられる。⁽¹⁾勅撰作者部類には「叡山阿闍梨 源俊頼子」とあり、これを信ずれば、古今著聞集によって養和二年の賀茂重保尚齒会の際六十五才であったことがわかっている。同じく俊頼息の俊恵よりは五才年少の弟であったことになる。十七年後の正治二年の年記を持つ三百六十番歌合に採られているので、長命して新古今時代に至ったらしい。

大取氏は和難集の「祐盛云」の引用にも言及され、祐盛の言説として扱っておられる。また、これを集成し、一覧表にしておられるが、私見によれば十三条ほど脱けており、誤りもあるようなので、ここに改めて掲げることにはしたい。最上段は通し番号、ついで『日本歌学大系』別巻二の頁数、被注語（見出し語）等を表示する。下欄は別出で、奥義抄・和歌色葉及びその他の歌学書に同一の注がある場合、やはり『日本歌学大系』の頁数でそれを示した。「？」を付したものは認定に不安の残るものである。なお、

頁／被注語		歌色		義抄		その他	
① 383	はすはな	217	236	285	童146	陳状67番	
② 398	とぶひの野もり	250					
③ 399	とよのあかり	243					
④ 400	とものみやつこ	276					
⑤ 406	とこなつ						
⑥ 407	ときはの山						
⑦ 411	ちとせのさか	237					
⑧ 412	ちのなみだ						
⑨ 417	おきなさび						
⑩ 421	奥津白浪	287	337	325	童190?		
⑪ 424	をさをさし	348					
⑫ 433	かべ	272					
⑬ 435	かづらのを						
⑭ 436	雁の玉章	220	252		俊頼髓脳171		
⑮ 438	かさゝぎのはし	224			童298?		
⑯ 441	かげろふ						
⑰ 444	かくなは	348					
⑱ 449	たるみ						
⑲ 455	たまきはる	265	176				
⑳ 461	そがきく	230					
㉑ 468	つくばね	254					
㉒ 471	つじがけた	229	222	259	頭昭堀カ		
㉓ 471	つまとゝのふ	337	347	331	童190?		
㉔ 472	ねずりの衣						
㉕ 473	ねこし山						
㉖ 479	涙川						
㉗ 482	なみだのたま						
㉘ 482	むらさきのいろこき	337					
㉙ 483	むらさきの雲						
㉚ 487	うらしまのこ						
㉛ 488	うちのはしひめ						
㉜ 499	野なかのしみづ	231	221	226	223	238	
㉝ 500	くものふはて	327	338	332	287	276	
㉞ 500	くものふはて						
㉟ 501	くもり日のかげ						
㊱ 501	くはち						
㊲ 501	くはち						
㊳ 501	くはち						
㊴ 501	くはち						
㊵ 501	くはち						
㊶ 501	くはち						
㊷ 501	くはち						
㊸ 501	くはち						
㊹ 501	くはち						
㊺ 501	くはち						
㊻ 501	くはち						
㊼ 501	くはち						
㊽ 501	くはち						
㊾ 501	くはち						
㊿ 501	くはち						
502	くはち						
503	くはち						
504	くはち						
505	くはち						
506	くはち						
507	くはち						
508	くはち						
509	くはち						
510	くはち						
511	くはち						
512	くはち						
513	くはち						
514	くはち						
515	くはち						
516	くはち						
517	くはち						
518	くはち						
519	くはち						
520	くはち						
521	くはち						
522	くはち						
523	くはち						
524	くはち						
525	くはち						
526	くはち						
527	くはち						
528	くはち						
529	くはち						
530	くはち						
531	くはち						
532	くはち						
533	くはち						
534	くはち						
535	くはち						
536	くはち						
537	くはち						
538	くはち						
539	くはち						
540	くはち						
541	くはち						
542	くはち						
543	くはち						
544	くはち						
545	くはち						
546	くはち						
547	くはち						
548	くはち						
549	くはち						
550	くはち						
551	くはち						
552	くはち						
553	くはち						
554	くはち						
555	くはち						
556	くはち						
557	くはち						
558	くはち						
559	くはち						
560	くはち						
561	くはち						
562	くはち						
563	くはち						
564	くはち						
565	くはち						
566	くはち						
567	くはち						
568	くはち						
569	くはち						
570	くはち						
571	くはち						
572	くはち						
573	くはち						
574	くはち						
575	くはち						
576	くはち						
577	くはち						
578	くはち						
579	くはち						
580	くはち						
581	くはち						
582	くはち						
583	くはち						
584	くはち						
585	くはち						
586	くはち						
587	くはち						
588	くはち						
589	くはち						
590	くはち						
591	くはち						
592	くはち						
593	くはち						
594	くはち						
595	くはち						
596	くはち						
597	くはち						
598	くはち						
599	くはち						
600	くはち						
601	くはち						
602	くはち						
603	くはち						
604	くはち						
605	くはち						
606	くはち						
607	くはち						
608	くはち						
609	くはち						
610	くはち						
611	くはち						
612	くはち						
613	くはち						
614	くはち						
615	くはち						
616	くはち						
617	くはち						
618	くはち						
619	くはち						
620	くはち						
621	くはち						
622	くはち						
623	くはち						
624	くはち						
625	くはち						
626	くはち						
627	くはち						
628	くはち						
629	くはち						
630	くはち						
631	くはち						
632	くはち						
633	くはち						
634	くはち						
635	くはち						
636	くはち						
637	くはち						
638	くはち						
639	くはち						
640	くはち						
641	くはち						
642	くはち						
643	くはち						
644	くはち						
645	くはち						
646	くはち						
647	くはち						
648	くはち						
649	くはち						
650	くはち						
651	くはち						
652	くはち						
653	くはち						
654	くはち						
655	くはち						
656	くはち						
657	くはち						
658	くはち						
659	くはち						
660	くはち						
661	くはち						
662	くはち						
663	くはち						
664	くはち						
665	くはち						
666	くはち						
667	くはち						
668	くはち						
669	くはち						
670	くはち						
671	くはち						
672	くはち						
673	くはち						
674	くはち						
675	くはち						
676	くはち						
677	くはち						
678	くはち						
679	くはち						
680	くはち						
681	くはち						
682	くはち						
683	くはち						
684	くはち						
685	くはち						
686	くはち						
687	くはち						
688	くはち						
689	くはち						
690	くはち						
691	くはち						
692	くはち						
693	くはち						
694	くはち						
695	くはち						
696	くはち						
697	くはち						
698	くはち						
699	くはち						
700	くはち						

「童」としたのは和歌童蒙抄である。(表)

付注歌の出典は示さなかったが、金葉集までの勅撰集・万葉集・堀河百首・その他の古歌と広範囲にわたっている。

これらの「祐盛云」について初めて本格的な検討を試みたのは原田芳起氏「大東奥義抄管見」(かがみ 8、昭 39・3。のちに改稿、「大東奥義抄管見」として『探究日本文学 中世編』昭 54 に収録。『金文庫本奥義抄管見』)であった。原田氏は奥義抄の伝本中特殊な本文を有する大東急記念文庫本の性格を考察して、これを改訂増補本と位置づけ、清輔が他の歌人からの批判をうけいれようとして自ら改訂の筆を加えたものと論じられたのであるが、その立場から注目される現象として、和雜集所引の祐盛説に奥義抄と同文的な記述が多く、しかもその本文が大東急本に非常に近いということとを指摘されたのである。

前掲の一覧表に奥義抄との重載状況を記入しておいたが、いかに多くが共通するかが明らかにならう。原田氏の挙げられた例(①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩)と重複しないように二、三例掲出してみる。(奥としたのが奥義抄の該当部分である。)

⑬祐盛云、琴にはかづらのをといふ事のあるなり、隠遁などは琴の緒たえぬれば、くずかづらなどをもちあふるゆゑなり。

古詩にも、風排琴上二葛絃鳴と作れり。

(奥)琴にはかづらのをといふ事あり。隠逸などは琴の絃たえぬればくずかづらなどを用ゐる故なり。古詩にも風排琴上二葛絃鳴とつくれり。

⑭祐云、是は慶雲の心をよめるなり。御門ささきのいでき給ふ

べき所には紫雲のたつなり。南仲記云、紫雲端に膺て堯を生也。雲は向出北斗三九、南風雲瀧漢之上臻ル、堯母感氣扶袖、雲受令下て入二堯母之懷、堯妊也。帝王世記云、堯帝王生時、紫雲覆於殿上、此帝時住遷二九年之洪水、人民謗不菜食云々。

(奥)これは慶雲の心をよめるなり。みかと后の出でき給ふべき所には紫の雲のたつなり。南中紀云、紫雲之端に膺て堯を生也。雲向二於北斗一乘二南風一雲瀧漢之上に到、堯母感氣扶袖、雲愛之下入二堯母之懷、堯を妊也。

⑮祐云、下の帯とは束帯にはうへ下に帯をすれば、下の帯とよめり。おびははしは左右にわかるれども、引まはしては前にあへば、めぐりてはあはんとそへたり。

(奥)おびは、はしは左右にわかるれども引まはしてまへにあへば、かのおびのやうにかたゝゝわかるれども、ゆきめぐりてあはむとはそへたる也。下帯とは束帯には、うへしたにおびをすればいふ也。

⑯はほぼ同文。⑰は傍線部分が奥義抄になく、⑱は記述の順序が異なっているが、それを除けば同文に近い。一覧表に重載を記した項目は、ほとんどがこのような一致を示す。

右に挙げたのは奥義抄の本文上、流布本や歌学大系本のような改訂前のものと大東急本のような改訂本との間に大異のない項目を選んだのであるが、改訂によって内容の変った項目では、祐盛抄の注は改訂本の本文によく一致することが原田氏の詳細な比較によって確かめられている。

奥義抄の改訂の動機を、他の歌人からの批判にもとめる原田氏は、右の現象を、清輔が祐盛の批判をとりこんだ結果であると解釈された。

祐盛の著述（仮に祐盛抄とも呼ぼうか）は『奥義抄』の説を批判した条々があるから、勿論『奥義抄』よりも後のものだが、逆に束（大東急本を指す——浅田注）の祖本が原撰『奥義抄』に施した改稿にかなり顯著に影響しているから、原撰『奥義抄』批判などを主内容とする学書であり、清輔の眼にも入ったものかと思われる。それが感情的な難奥義抄的性格を有するものであったら、清輔が虚心に採用して改訂の資とする事はなかったであろうから、祐盛が清輔と親しい人間関係にあった人物であったかとも思われる。祐盛の抄物と『奥義抄』改訂との間には、なにがしか本末関係があったようである。

すなわち、改訂本奥義抄と祐盛抄とが似ているのは、改訂本奥義抄が祐盛抄を書承吸収したからだ、と考えられたわけであるが、はたしてそうであろうか。

右の現象からは、二つの場合が想定可能であるはずだ。つまり、

(a) 清輔が祐盛抄を参考にして奥義抄を改訂した。

(b) 祐盛抄が改訂本奥義抄を資料として抄出転載した。

のどちらであつても同様に両者は相似するであろう。原田氏は(b)の可能性を検討しておられないが、私見では、実は(b)が正しく、(a)（原田氏説）は成り立たないと考ええる。

それは、祐盛抄が③と⑤とにおいて六百番歌合の顯昭陳状と俊

成判詞とをそれぞれ引いているからである。六百番歌合の披講・加判・難陳がいつ行われたかは必ずしも明らかではないが、建久四（一一九三）年ないし五年の頃であらうとされている。従つて祐盛抄の成立はそれ以後であり、治承元（一一七七）年に没した清輔が祐盛抄を披見することはない。③と⑤とを後の増補とみる徴証のない限り、(b)の立場をとるべきで、祐盛抄は奥義抄の改訂には関係がなく、単に改訂本奥義抄から同文的引用を行ったにすぎないのである。

それでは、この立場から祐盛抄を眺めると、それはどのような作品として見えてくるだろうか。しかし、それを考察するためには、和歌色葉との関係を見ておかねばならない。

二、祐盛抄と和歌色葉

祐盛抄は奥義抄と密接な関係を有することを見たが、同様に深い関係にあるのは和歌色葉である。両者に共通の記述が存在することはすでに村尾誠一氏が指摘しておられる（『研究資料日本古典文学』11「漢詩・漢文・評論」の和歌色葉の項。但し堀河百首注についてののみ）。しかし、具体的な調査結果を発表しておられるわけではないので、私に調べたものを前掲一覧表中に示しておいた。これもまた非常に多くの部分で一致することが知られよう。そして、これも同文的な関係にたつものが大半なのである。左に例を示そう。

⑦祐云、今日のみあれとは祭のさきの日大明神の前の山の上の旅所におはしますを云なりとぞ、賀茂の案内者は申しけり。

猶々可尋。又みあれとは御所生とかきたるとかや。もし生れ給ひける日にや。

(色) けふのみあれとは祭のまへの日、大明神前の山のうへの旅所に御するをいふとぞ賀茂の案内者申ける。なほ／＼尋ねべし。又みあれとは御所生と書きたるとかや。若し生れたまひける日にや。

③ 後まことにやなべてかさねしをみ衣とよのあかりのかくれなき世に

祐盛云、此歌は源頼家朝臣のあひしれる女の五節に出たりけるが、こと人に物いはるゝときゝつかはしけるなり。とよのあかりをみな人五節にのみよみならはせるに、まぢかく九条殿下の内大臣家に人々百首よみける時、元日宴といふ題に、願昭阿闍梨歌云、

むつきたつけふのまどゐやもゝしきのとよのあかりのはじめなるらん

と読りけるを、人々かたぶきて、とよのあかりとは五節也。

元日宴は正月朔日の節会なれば、ひが事なりと難じけるに、作者、豊の明とは日本紀に宴の字を讀り。是則せちあなり。

いはゆる正月朔の元日節会、同七日白馬の節会、同十四日踏歌の節会、九月九日重陽節会なり。五節。脱款。此五箇度の節会の

宣命にみな豊明きこしめす日なりとかけり。豊はゆたかなる

心、明はあきらけきよなり。或は豊桑ともかけるについて、

元日宴を豊の明はじめにいはひてつかうまつれるなりと陳申しければ、難者、英才、当世の歌仙、各くちをとちてかし

らをかたぶけるとかや。まことに五節は一の節会なればいひきたれるを、五節ばかりに読むべしとさだむる事は、ふかくしらずして浅く難けるなるべし。よみくち譜代はいうにいまする人多けれども、広才博覧はこゆべきたぐひすくなければ、件の阿闍梨を広学なりとは人申けるとかや。

(色) (歌略)

をみ衣は異名の中にいへり。この歌は源頼家朝臣あひしれる女の五節に出でたりけるが、こと人に物いはるゝと聞きてつかはしける也。この豊明をばみな人かやうに五節にのみよみならはせるに、まぢかく九条殿下内大臣家に人々百首歌よみける時、元日宴と云題に願昭阿闍梨の

むつきたつけふのまどゐやもゝしきのとよのあかりのはじめなるらん

とよめりけるを、かれこれかたぶきて、とよのあかりは五節也。元日宴は正月朔日節会なれば、きはめたるひが事也と難じけるに、作者豊明とは日本紀に宴字をよめり。これ則節会也。いはゆる正月一日は元日の節会、同七日は白馬の節会、同十四日は踏歌の節会、九月九日は重陽の節会、新嘗会は五節の節会也。この五箇度の節会の宣命に、皆とよのあかりきこしめす日なりとかけり。豊はゆたかなる心也。あきらかはあきらけき世也。或は豊桑ともかけるにつきて元日宴をとよのあかりのはじめに祝ひてつかうまつれりと陳申しければ、難者の英才当世の歌仙各口を閉て悉頭を低げるとかや。この儀をば先達も此定にぞ沙汰せし。ま

ことに五節は一の節会なれば折につけていひきたれるを、五節ばかりに豊明をよむべしと定むる事は、ふかくしらずして、あさく難ずるなるべし。読口譜代はいうにいまする人多かれども、運心劬勞はこゆべき輩すくなければ、件の阿闍梨を広学なりと、この入道が「わたくしに」ゆるし侍る也。謗家どもは定てあざけりわらひあはれむか、いかん。このほかに、祐盛抄が多かつたり、和歌色葉が多かつたりというケースはあるが、重複部分については同文とみてよい。これほど一致するのであるから、両者に何らかの關係がなければ説明はつくまい。その場合、最も自然に考えられるのは一方が一方を書承したというケースである。

もちろん、同一の資料に取材したために同文的になることは当然ありうる。前掲一覧表をみればわかるとおり、両者が一致している部分の多くが奥義抄とも共通し、奥義抄などを両者ともに取材源としたために同文的な項目が生ずることはあっただろう。しかし、右に挙げた⑦と③などいくつかは別資料には見えない。これらについてはどう考えたらよいであろうか。

一 応次の三つの場合が想定できよう。

- (1) 現存しないある資料から祐盛抄・和歌色葉がそれぞれ書承した。
- (2) 祐盛抄から和歌色葉が書承した。
- (3) 和歌色葉から祐盛抄が書承した。

このいずれが正しいか判断する上で、前掲③「とよのあかり」は重要な意味を持つように思われる。

③ 本文は、和歌色葉の方が誤脱が少ないが、祐盛抄がわに伝写間の錯誤もあらうから、そこから両者の先後は判定できない。それよりも注目すべきは両者の末尾が異なっていることである。祐盛抄は、

件の阿闍梨を広学なりとは人申けるとかや。
とするのに対し、和歌色葉は

件の阿闍梨を広学なりと、この入道が「わたくしに」ゆるし侍る也。謗家どもは定てあざけりわらひあはれむか、いかんと極めて特徴的である。ここで「この入道」というのは上覚自身のことではない。和歌色葉という作品は大鏡に似た設定をとり、「商山の霜を眉に垂たる入道」と「渭濱の波を面に曇みたる老翁」とが雲林院の説法に集った聴衆の中で行きあい、「老翁」が「入道」に自分の初孫のために和歌の難義を授けてくれるよう依頼し、「入道」がそれにこたえて語ったものをちよと居あわせた西山隠士（上覚）が書きとめた、という体裁になっている。従って和歌色葉の歌学記事はすべて「入道」の語りであり、この③にあらわれる「この入道」も彼の自称である。

ただ、和歌色葉全体を通じてみても、語り手「入道」が前面に出てくる部分は非常に少ない。「入道」「老翁」といった人物が語りあうのは序と跋のみで、あとは普通の歌学書のスタイルとほとんど変らない。ここでは、なぜ「入道」が突然浮上してきたのかを考える必要がある。

和歌色葉という作品は（特に③部分を含む中・下巻「難歌会釈者」は）ほとんどすべて奥義抄や和歌童蒙抄の転載で成り立って

おり、編者上覧の考えが表に出てくることは稀である。その中に突如「入道」が登場するのは、上覧が単なる引用集成者の立場を離れて、何かを主張したかったからではないか。

では、③で「入道」は何を主張したのかといえ、それは「説口譜代はいかにいまする人多かれども、運心勲勞はこゆべき輩すくなければ、件の阿闍梨を広学なりと、この入道が「わたくしに」ゆるし侍るなり」という願昭賛美であったのである。さらに、「謗家どもは定てあざけりわらひあはれむか、いかん」と、建久頃の歌壇状況の中で、徹底して願昭の側につき、「謗家」の非難をうけることを厭わないという意志をも表明している。

ではなぜ上覧は願昭を賛えようとするのだろうか。おそらくそれは、和歌色葉が成立後すぐに願昭の校閲を経ている（付載文書から知られる）ことと関係があらう。つまり、上覧は実際願昭を尊崇してもいたのだから、願昭に見てもらふことを予め念頭におき、願昭を賛美する文言を「入道」の語りの形で挿入しておいたのではないかと考えられるのである。

似たような例は上巻「撰抄時代者」の万葉集の条にも見える。

平城天子勅にて萬葉集を撰ぜらる。難義をばあらはしてやすきをかくす集也。素戔鳴の始より人皇五十二代まで萬のときよをあつむれば萬葉集といふ也。大同年中の時侍臣に詔し給へるを、橘大臣諸兄とおし義をなすやからあり。奈良帝と申せば聖武天皇の御事と、時代の前後をわきまへず、ひが事をいふ人もあり。（113頁）

ここも和歌色葉には珍しい感情的な筆致で万葉集の〈聖武―諸

兄〉撰説を非難し、〈平城―侍臣〉撰説を主張しているが、周知のとおり後者は願昭説であり、前者は清輔（袋草紙）・俊恵（願昭古今集序注等所引）・道因・勝命（万葉集時代難事所引。勝命は勝命古今集序注にも）・俊成（万葉集時代考等）らの説であって、明らかに上覧は願昭の側に立って俊成等に対し「おし義をなすやから」と攻撃を加えているのである。

③部分にもどり、和歌色葉の末尾部分が、「謗家」をおとしめて願昭との一体を表明するために書かれているとするなら、祐盛抄と和歌色葉との関係はおのずから決まってくることになるう。「とよのあかり」の真義で「難者の英才当世の歌仙」を閉口させたというこの話全体が願昭賛美の方向でつらぬかれているのは明らかで、それが上覧の個人的事情に由来しているなら、当然和歌色葉がオリジナルであることになるからだ。祐盛抄は和歌色葉を書承するにあたって、「入道」うんぬんの特異なコメントをとりこみきれず、「……とは人申けるとかや」という当り障りのない結びに変えてしまったのであらう。

まとめて言えば、③部分における願昭賛美の色調について、和歌色葉の方にそうあるべき必然性が認められ、オリジナルであると推定されるということである。つまり、先に両者の関係について想定した(1)・(3)のうちから(3)「和歌色葉から祐盛抄が書承した」を採ることになる。もちろん、断定するためにはなお確実な証拠が必要であらうが、祐盛抄が散佚してしまっている現在、このような推測に依るほか方法がなく、その限りでは右のように見ておくのが適当であらうと考える。

ところで、祐盛抄と和歌色葉との先後は、そのまま祐盛抄の成立という問題に関ってくるのは言うまでもない。右に述べたように和歌色葉が先行するとすれば、和歌色葉は建久九年(一一九八)五月上旬の完成と考えられているので、祐盛抄の成立はそれ以後となる。一方、祐盛はその年八十二歳で、彼の生存は正治二年(一一〇〇)までしか確認されていない。もし真作なら最晩年、死ぬ直前の作ということにならう。

真作でなく仮託と見るなら、他に内部徴証のようなものはないので、成立の下限は現在の所、これらの佚文を収載する色葉和難集の成立によって定めるほかはない。ただし、和難集の成立についてはいろいろ論じられているものの決め手に欠けるように筆者には思われ、久曾神昇氏の言われる嘉禎二年(一二三六)以後間もなくか、という説をもとに、おおよそ鎌倉中期かと推測してはいるが確実ではない。西下経一氏のように至町まで下げる説もあるのである。

だが、もし仮託であるとするなら、祐盛のような知名でない人物を選ぶ必要はどこにあるのかという点は不審としなければならぬ。俊頼息ということから名を借りたということはありうるかもしれないが、佚文中には俊頼の秘伝と称するような箇所は見えないのである(全体に「秘伝」的要素は見られないといつてよい)。内容的にも、鎌倉極初期成立のものとして不審な点はなく、祐盛作の所伝を否定するには及ばないのではあるまいか。真作であるという保証はないが、本稿ではその可能性が高いものとして扱いたい。

三、祐盛抄の性格

祐盛抄は奥義抄を多く引載し、和歌色葉をも資料としていることをここまで見てきた。なお、奥義抄との重載項目の多くは和歌色葉と共通し、さらにその中には、本文的にみて和歌色葉からの孫引きではないかと考えられるものもある(紙幅の関係で挙例は略する)。しかし、⑦⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺について和歌色葉にみえないので、独自に奥義抄を参照もしていることは確かである。

このほかには現在知られている歌字書で確実に資料となったものはない(童蒙抄は和歌色葉経由かと思われる)ようであるが、それでもこの二書との重載項目は65項目にのぼり、全佚文87項目(重複ひとつを除く)のうち74.7%に達することは注目すべきである。しかも、そのうちわずかでも祐盛抄が情報を付加した項目は17条(②⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺)にすぎず、同文的な転載ないし略引がその多くを占めているのだ。

この比率を原型の祐盛抄にあてはめてもそれほど誤ることはないと思われる。すなわち、祐盛抄は少なくとも全体の七割以上を奥義抄・和歌色葉などの転載によってまかなない、しかもそれに自ら資料を増補することも多くはなかった歌字書であると推定される⁽⁹⁾。

さて、この作品を我々はどのようにうけとめればよいのだろうか。祐盛抄は確かにオリジナリティには乏しく、当時の歌学界に対する貢献という点からみればあまり重要なものとは言えない。

(それでも検討に値しないわけではなく、先行文献に見えない説に興味をそそる部分も存するが、今は触れない)。

しかし、視点を變えてみよう。転載が多いということは、要するに基本的には先行学書の抜き書きだということである。そうであれば、むしろ歌学説の享受の資料として考える方が適当なのではないか。

さまざまな歌学説が飛びかい、それを取りこんで作歌することが重視された院政期、歌人たちは歌学書を書写すると同時に、自分用にそのめばしい項目を書き抜いたメモのようなものを作って所持していたであろうことが容易に想像できるが、実はその種のメモは現在残されていないのである。祐盛抄をそのような作品と考えることはできないだろうか。もしそれが許されるのならば、清輔等の著作が享受され、作歌に反映していく過程を示す貴重な遺品ということになるだろう。

現在わかる限りでは、祐盛抄が抜き書きの対象としているのは主に奥義抄と和歌色葉である。平安末期の歌人たちにとって、奥義抄は何よりもまず読まねばならぬ本であり、必須の教養であった。教長古今集注・勝命古今集序注・俊成の古今問答がみな奥義抄を重視し、定家も自筆の奥義抄を遺すなど、他人にやすやすと見せてはならぬはずの灌頂巻を含めて、歌人たちがよく学習していたことが知られるのである。祐盛抄が奥義抄を多く抜き抄するのは当然といえよう。

一方和歌色葉は、奥義抄を中心にして諸々の歌学説を集成整理した大辞典のようなものである。これも抜き書きを作るときには至

便な書物であると考えられ、祐盛抄の資料採集姿勢をうかがわせるものがある。

もちろん祐盛抄はすべてが抜き書きではなく、オリジナルな説も述べられている。自分用のメモに、物を調べているうちに得た新見も一緒に書きこんでいくというのはむしろ自然なことであろう。しかし、全体に占める割合からいって、本書の主目的は自説の開拓・提示というところにはなかったと考えるべきである。そのほか、本書作製の動機として、例えば初学者用に祐盛が既製の歌学書を抜粋して与えるというような場合も考えられよう。

その場合でも、実用のために再編されたものという性格自体にはなく、同じように歌学説の享受資料と考えることができる。なお論すべきことは多いが、祐盛抄の成立についての基本的な考証と、その性格についての私見とをひとまず示して本稿を終えることにしたい。

(注) (1) 他に月詣集・寿永百首の側から言及したものとして井上

宗雄氏『平安後期歌人伝の研究』(昭53初版・昭63増補版) などがある。二見浦百首からの言及もあるだろうが未調査。

(2) 以下の引用は『日本歌学大系』により、特に必要のない限り見出しと被注歌は省略した。

(3) ただし、大東急本で大きく内容が変った項目で、祐盛抄が改訂本に一致する例として原田氏の挙げられた②③は、実は和歌色葉にはほとんど同文で出ており、後述するように祐盛抄が和歌色葉を資料としているとするならば、改訂本奥義抄との直接的な関係はないということも有得る。なお、

下巻に限っては改訂本奥義抄が地にも伝存することが川上新一郎氏「顯昭著作考」(一)(斯道文庫論集22・昭63・3)205頁に指摘されている。

- (4) 奥義抄を批判した条というのは②⑦のことであろうかと思われる。②は和難集が「奥義抄云」として「そがぎく」黄菊の説を掲げ、それに続けて「祐盛云、きよくといふ事、心ゆかず」と別説を掲げているもので、祐盛抄が奥義抄そのものを引いていたのか、他の同説の資料を引いていたのか判断できないので一覽表では重載を記していない。
- ⑦は和歌色葉と同文で、後述するようにそちらから引いたものかと思われる。

- (5) 正確に言うと、氏の御論稿の初稿では(b)の可能性にも一節言及されていたのであるが、単行本収録の際に削除されたのである。

- (6) 上覚の顯昭資美については黒田彰子氏「和歌注釈をめぐって——和歌童蒙抄と和歌色葉——」(和歌文学研究53・昭61・10)にも言及がある。

- (7) 久曾神昇氏『日本歌学大系』第三巻解題に従う。

- (8) 西下経一氏「色葉和難集の作者」(文学10・昭7・3)は、貞応本に類する奥書を持つ定家自筆の古今集が「將軍の御所」にあるという記述から室町成立説をとるが、くわしい説明はない。久曾神氏『日本歌学大系』別巻二解題

- (昭33)は定家・家隆の称呼を根拠とする。川瀬一馬氏『古辞書の研究』(昭30)は和難集の引く長明文宇鑑が作者による改訂前の原撰本であると主張し、和難集の成立は長明の没する建保四年(一一二六)以前とするが、仮に長明文宇鑑原撰本を長明自作と考えても、何故それを長明没後に他者が披見しえないのか不審。なお同氏は「中世における辞書の二三について附大永四年鈔本金句集」(青山学院女子短期大学紀要10・昭33・1)で「鎌倉中期を下らぬ頃の」和難集切を紹介しておられる。渋谷虎雄氏『中世万葉集研究』(昭42)は、和難集の引く万葉歌が旧訓によっていることから、その成立を仙覚の改訓の行われた寛元元年(一二四三)以前とするが、改訓後に旧訓本が姿を消してしまいうわけではなく、論拠とはしがないと思う。

- (9) 祐盛抄が他に歌式や名所等、和難集には引用されない性格の部分を持っていたら簡単に推測できないのであるが、いまは歌語についての説のみを考えて言うのである。
- (10) 当時祐盛が高齢で、すでにひとかどの歌人と考えられていること、経房家では指導的な立場にあったらしいこと(吉記元暦元年十一月三日条・文治元年五月五日条。前掲杉崎氏・大取氏の論稿参照のこと)などを考えると、こちらの可能性の方が高いかもしれない。